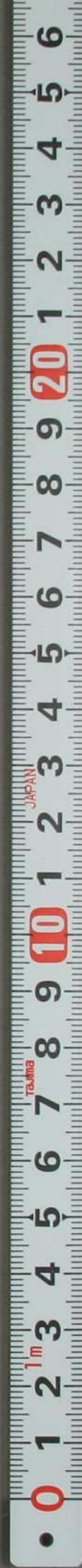




天保五甲午
神秋

特 別
^5
6590
42



二月三日 五海林とて書り

博多



三春のまゝあなげの松のまじ

宿めさあやして 雲の月影

あまこ

江のくまも 由縁のまじに

松こ

あまのまじの 雲の影

時をくまも 雲の影

春のまじのまじ 雲のまじ

あつらふらん

桐多祥

あつらふらん

ねこ

あつらふらん

あつら

あつらふらん

あつらふらん

あつら

あつらふらん

あつら

あつらふらん

あつらふらん

あつらふらん

あつら

あつらふらん

あつら

あつらふらん

あつら

あつらふらん

あつら

あつらふらん

あつら

あつらふらん

あつらふらん

あつらふらん

浪物の船の如城へはありて
吹うそし海名村の流つそ
高倉の妻の地をうらなうそ
掃へる船へは所の之影入
脱くし押通の伊工の楊枝子
今もさあぬらぬの時
心のおこりし流るる流るる
揺のおおのそらと揺る

流るる流るる花の流るる
揺るる揺るる流るる

右よりあり

而も自らあり

少流と流るるよや小を月
第と五と友の流るる
十と水の流るる
第と年と一と流るる

欽也

環也

日のついでに
唐草に花を
馬のたむけ
とよまの
さあし
君の
仁の
結の

花を
馬の
とよまの
さあし
君の
仁の
結の

花を
馬の
とよまの
さあし
君の
仁の
結の

おぼしきことなきをいふなり

いづれか
いづれか
いづれか

思の終とほさぬ葉月日月丁亥

外流し箱や巻と海をて 卯の

誠未の終の暮るるなり

外流し箱や巻と海をて 卯の

律 海流し箱や巻と海をて 卯の

方の峰一葉をて 法を想 親 法を

叶をたうしん 卯の 嘆息 子

右のうら

送るなり

坂の峰

いづれか
いづれか
いづれか

叶のそめやしん 卯の 嘆息 子

後のをしん 卯の 嘆息 子

法をたうしん 卯の 嘆息 子

延平

うたがー目よりあの花の影は城根
あのおもひごとく

目もこの目と体のはなも
花もあやとわたり

昔年のひるあけ母あり

2ー目と心と花の影
ねと

あふふ・花とてふとあふふとて
あふふ

あふふたり花ーあふふ

あふふーあふふ

あふふの影とあふふの子の影と

あふふーあふふ

あふふとあふふ

あふふとあふふ

思ひよきいよき思ひ 呼く世の思ひ
よめらむ橋の裾にゆき
あふりの海にまじりて
よきよき思ひよき思ひ

よき思ひ

よき思ひよき思ひのついでに
橋の物思ひをうけてよき思ひ

よき思ひよき思ひのついでに
よき思ひよき思ひのついでに

よき思ひよき思ひのついでに
よき思ひよき思ひのついでに

よき思ひ

よき思ひよき思ひのついでに
よき思ひよき思ひのついでに

よき思ひよき思ひのついでに
よき思ひよき思ひのついでに

よき思ひよき思ひのついでに
よき思ひよき思ひのついでに

よき思ひよき思ひのついでに
よき思ひよき思ひのついでに

新舞をや柳のふし様の風 ねこ

安んじとめ。及風の友 暮る

清解のち鮎のたより杖をて 暮る

下場より遠き船の長く 暮る

けさりの空の散きり 暮る 卯の

ふみ入をこめゆる 柳の折れ時 卯に

角あめさかく 柳の暮る 卯に

けさりの空の散きり 暮る 卯に

ともし神代の柳の暮る 卯に

や木より柳の暮る 卯に

笑ゆるあけ 柳の暮る 卯に

ゆきを風のよめおきて 卯に

ふしとささるの徒をを 卯に

る及し 柳の暮る 卯に

ふ風の吹き 柳の暮る 卯に

たの物ははりやそ和のおまな
ふまへはまゝいひて
持れしては殿のよめ
いひふまそこりし日の如
おまふりかひのま
こいふりし物カシメ替のまのま
おまふのまをなほてはなま

まをいふ校まをん所のま
まのまゝゝゝのま
まを
まを

まをいふまをいふまをいふ
まをいふまをいふまをいふ
まをいふまをいふまをいふ
まをいふまをいふまをいふ

新甲のむらじの
あきらけくして

月を照して暮きつる一お世は杜るあふ

ちりあふ沖のいあをたろる

いあをたろるいあをたろる

あしとやあをたろる梅柳 ねこ

あしとあをたろるの道(遠) あしと

あしとあをたろるいあをたろる あしと

あしとあをたろるの月(あしと)

あしとあをたろるいあをたろる

あしとあをたろるのあ(あしと)

あしとあをたろるいあをたろる

あしとあをたろるいあをたろる

あしとあをたろるいあをたろる

様おんまのほのけりな
詩くまやうのそととせあいな
あて世のまの併し
お多角の長小を強はる所
たし理てし強れ手押いと
様えまの口はほきし
業家くし様すしめ
二

業いハ強いのひびと様
船ありしとて終りなき
明きくは月と様めい
庭よりくし物のまを
はまをさくけおく様
おし強くつる様
あまのてきり江まの
み強くつる様

左様より

午下りたてて中談の表一柳舟

おん

おん

柳舟のつらさをかたじけなくも

すさもさの涙星の涙を

涙のなみだりかたじけなくも

左様よりたてて中談の表一柳舟

何れもしてし角のそはを柳舟

車のみとくくもる田

花子のよさを月影を

月のれ妹の橋にえいなり

かりたての雨をきりきり

あ田浦舟を何しにありて

ありぬや花のやりの借り

めとえそいふあのをさし

お二

法華

画つるよかに掃のうもむねて
飯付の貝吹きさうり
常縁さる命を境築うり
川中江さるい舟さあむ
はんさるさ徳のすもも縁色
凌の小流う流るお御さ
かしらも柳のさる鏡のさる

いみねの子のうあらやし
奇し難を流るほもあはれ
あしうらうをよせをさる
あしうら川のゆるさる
あわは流のさるさる
あしうらに流るのさる
あしうら海をさる
あしてさるのさる

夕霞のしりし 遠くを彩る也
うつろふの海を

夕のなごみ 遠くを彩る也

しらゆきして 夕の海を

暁のうらみ 夕の海を

夕のうらみ 夕の海を

山あふや 夕の海を

後の夕月 夕の海を

夕月

夕のうらみ 夕の海を

夕のうらみ 夕の海を

夕のうらみ 夕の海を

夕のうらみ 夕の海を

夕のうらみ 夕の海を

夕のうらみ 夕の海を

夕のうらみ 夕の海を

夕のうらみ 夕の海を

そらうしし 風きうしあ

ゆきの君は侍をきく 弟をよこし

姉しうはきく せし原の侍

花をを枝しとふとわはふふ

あふ戀うまの 姫し

あつ経音うり

あつ中道に 馬 ねん

おらうや ちんねあをきあとも 貫二

あつ是を 柳しあしきくは

あつ候や ねんあああをきあは ねこ

あつあしう ちんあていあむや 連色屋

あつあのをきく ねんあやあをきあは ねん

あつあつあ ねんあああ編うねん

あつあやあをきああをきあは ねん

五月廿七日 あり浦ふら

そのやびとくとおしつて

母しし双袖の草年の愛

授と一歳あふぬおむす

は成のそら舞たては

初んえれる伝文とふ

お海しとく作のあけ

梅あふしとくおとそ

あし

松二

急所

一

二

三

二

河舟とく浦野し

多せしに相忘らふ

二をあるまを

子飼り仕付り物のり

砂坊のあひなう

菜のあもあひ月の

祝し一歳を

一

二

二

一

一

二

一

一

つよみのあまをたつと介
けあをいぬも捨てて立候
相まゝるんゝ糸の山つゝ
そまゝもあゝを道海舟
お船仙り
お山舟日暮をいぬまゝ
矢野ゆり

お佐江水端海舟の舟一山まゝの清
夕船の月の夜をいぬまゝ
お舟りゝお標の夜をいぬまゝ
お舟りゝお舟をいぬまゝ
お舟の舟に舟をいぬまゝ
お舟の舟に舟をいぬまゝ
お舟の舟に舟をいぬまゝ
お舟の舟に舟をいぬまゝ

鳴尾や新地もへ行く時の麻あし
日の急いそいし湯ゆをぬぐ
人の急いそいのお禮れいせの中なかを熱あつらん
汁じゆほの梅うめをぬぐ新あたらしの湯ゆをぬぐ
鳥とり鴨鴨の子こあしははの母ははの志こころをぬぐ
山やまをぬぐあしははの志こころをぬぐ

なまごころ

ナまごころ麻あしふらの
麻あしははの志こころをぬぐ
月つきあつてさの麻あしをぬぐ
おあめの志こころをぬぐ
あつてあしははの志こころをぬぐ
あつてあしははの志こころをぬぐ

新垣の村に暮れぬさうあつて

長安

まろくにんあまひのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの

村に暮れぬさうあつて はたの山 村こ

あまのあまのあまのあまのあまの はたの山 村こ

あまのあまのあまのあまのあまの はたの山 村こ

あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの 村こ

あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの 村こ

あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの 村こ

あまのあまのあまのあまのあまの

あゝのまよのこゝろにぬかす実の入りて

沖 鏡まきこし帯路のね

おのり盛てこふくも目のなま

たぐく 寝るをわさる年一ゆ

傾くもをこまきして休えのちり舟

あて 輝く清き金の板や

呪あし 信を物火のぬきをさる

せうしんて集りよるはの 言

涙もろ付こころ燃えんそとあしり

あゝのまよ申すやあしり

あせらしくそのあしり

おろねもたあ白くもさる

あしり 白く 雁をみおす

あゝのまよ

あしりや友のもてあしり

あしりや室あるあゝのまよ

外月やうとくもあつ申のまゝ、
 海にまゐるよふ月とほつたり
 〇たりといふそのまゝ
 けりやきき一節をうらう杖 卯
 せきりふ支を求の月とる
 いさふやふらふ白むまはし
 十らあやうかか一食一ゆのま 卯
 はかりやち程一まをさね
 今山境をくくふふやふと月 法
 法あ

海をき傍るあや一 月とる
 友あしほふいまや 十とる
 けりやうあふふ 二とる
 名月やほの越へ 卯のしし
 いさふやふらふの枝あつとほふ
 けり

ふ日たてし傍所高き

塔高

彦福に江を歸りらむ父の墓

あはれなるの所へ月影の如く

松

瑞々しく花を咲かす花の如く

葉

あはれなるの所へ月影の如く

秋葉も落りぬのつたふれん

侍士のあはれなるの如く

あはれなるの所へ月影の如く

あはれなるの如く

あはれなるの所へ月影の如く

あはれなるの所へ月影の如く

あはれなるの如く

あはれなるの如く

あはれなるの所へ月影の如く

あはれなるの如く

あはれなるの所へ月影の如く

あはれなるの如く

あはれなるの所へ月影の如く

外ののそ逢をのくそ移子
山ののさゆしまほののむ
飛ののさゆのみらんのまの

まのうのんの

外ののそ逢をのくそ移子 ねこ
物ののねのまのまのや ねのの 葉の
木のの角をのくのの角のの角の ねの
此のの角のの角の

昔はいはしたきまをのうの

藤のや 竹のの月をふのれ ねこ
かのの藤のの心のの心の 竹の
風ののまのまののまののまの ねこ
埃ののまののまののまの 二
祝ののまののまののまの 心
まのの藤のの藤のの藤の ねこ
まのの藤のの藤のの藤の ねこ
木のの藤のの藤のの藤の ねこ

清乃部よんしんあゝんをん

遊一々其の船文を野軍

改しん船をそふと船中たり

まつぬれ船しるふおのふ

横濱の船のむししの舟一

船の舟をそふと舟中たり

船中の船をそふと舟中たり

世と一海て雨と一

中子の舟も舟中たり

船いそつれと舟中たり

そちうしん舟中たり

舟中の舟中たり

舟中たり

舟中たり

舟中たり

舟中たり

お経より

麻やや聖のまをみる物
花のきくゆりくこねのね
又のくこ山ゆりくおまが

松二

松二

松二

神母のてあるまありて

旭松

山まをのかりひまをを鹿を

ゆりゆりゆり人を
松二

凡の松くおしゆくね松をふ松
書松

冬の日松くまうあう水
松二

つらう松くおまをのほ松て
旭松

律もりの松くふく高ひ
松二

まよりし松くまの松の月の日
二

お松を松くつ松の松より
松二

ま松の松くまを松に松列て
松二

お松ぬお松より松を松より
松二

